

児童生徒による学習評価の充実

—児童生徒が学びを実感し、学びをつなげる授業づくりを通して—

(2年次／2年計画)



問題と目的（主題設定の理由）

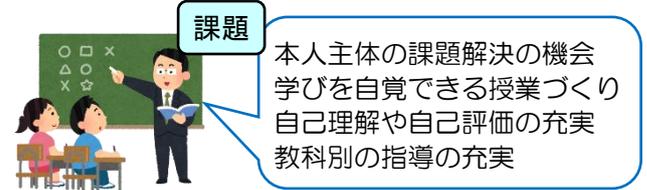
目指す学校像

「地域と共に歩み、地域で育ち、地域に必要とされるゆり支援学校」



これまでの研究の取組

「主体的に人と関わる力を高めるために」



社会的背景

各教科の目標・内容の再整理

育成を目指す資質・能力 3つの柱

学習状況評価 3つの観点

1年次の成果と課題

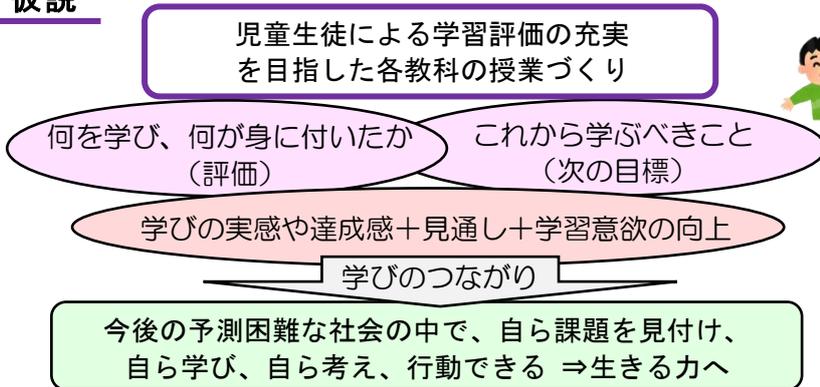
副題「各教科の授業づくりを通して」（○:成果 ▲:課題）

小学部 国語科
中学部 保健体育科
高等部 職業科・家庭科

- 資質・能力に合わせた事態把握とめあての設定
- ▲国語科と他教科との関連
- 体育ノートの活用、動画による自己評価
- ▲3年間を見通した指導計画
- 他の場面でも生かせるような授業展開の工夫
- ▲学びの蓄積を日常的に活用する場面の設定

「学習評価」により、教師が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるためにも学習評価の在り方は重要である 中教審報告

仮説



指導と評価の一体化の必要性

「児童生徒による学習評価の充実」何を学ぶのか分かる「めあて」(目標)が提示され、それに対する「振り返り」(評価)が児童生徒自身で行われていること。さらには、これから学ぶべきこと(次の目標)について、気付くこと。と定義する

内容与方法（2年次）



A：実態把握（アセスメント）
・授業づくりに関するアンケートⅠ



P：計画
・授業デザインミーティングⅠ +WG
⇒年間指導計画、単元・題材計画の作成



D：授業実践 +WG
・資質・能力の3つの柱での目標と学習評価の3つの観点での評価
・3つの共通実践事項の推進
・単元、題材計画の作成と評価



C、A：評価、改善 +WG
・授業デザインミーティングⅡ



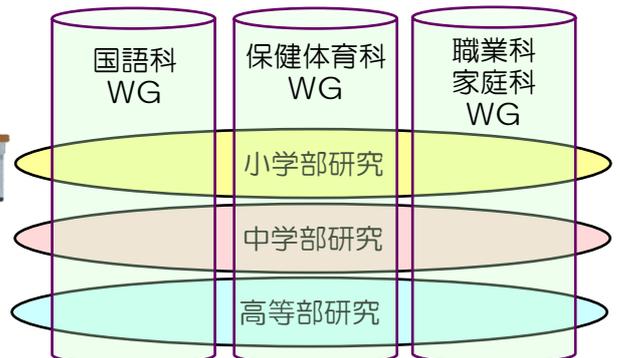
⇒年計、単元・題材計画の評価と見直し
・授業づくりに関するアンケートⅡ
・教育課程検討委員会への反映

【3つの共通実践事項】

- 1 「めあて」と「振り返り」の整合性の検討
- 2 児童生徒が学びを実感できる支援の工夫
- 3 児童生徒の学びがにつながる支援の工夫

【教科ワーキンググループ（WG）】

学部研究(年間13回)4回の活用
教科WG(全校縦割り)での研究の推進
メンバー⇒授業デザインミーティング参加



小学部 一 国語科

1年次の成果と課題 (○: 成果 ▲: 課題)

○資質・能力に合わせたためあての設定による、児童が分かる授業づくり ○児童の振り返る力の向上 ○教師の学習評価に対する意識の高まり	▲より適切なためあての設定と「何が分かったか」を大切にしたり振り返り ▲各教科等を合わせた指導との関連
---	--

児童の実態

- 児童全員が意欲的に国語科の学習に参加
- ▲学んだことを他の場面で活用することや、他者からの働き掛けに気付いたり、適切に答えたりすることなどに課題



目指す姿(2年次)

- ・国語科で学んだことを生活や他教科などで生かしている姿
- ・相手の話や問い掛けに気付いたり、考えて答えたりする姿



内容と方法

<小学部研究>

○実態把握①

- ・学習指導要領の活用→国語科の「目標」に照らして「内容」の習得状況をチェック(6月)
※参考: 福島県特別支援教育センター2020【学びの履歴】
- ・子ども理解シートの活用→自立活動の視点から児童の実態を捉える。

○授業デザインミーティング

○年間指導計画の作成

○授業づくり ・国語科

○関連の明確化: 単元配列表の活用

- ・日常生活の指導
- ・生活単元学習

○エピソード記録の蓄積

○授業実践

- ・模擬授業
- ・授業研究会
- ・授業を見合う会

○板書記録等を活用したためあてと振り返りについての情報交換

○実態把握②

- ・学習指導要領の活用→国語科の「目標」に照らして「内容」の習得状況をチェック(12月)
※参考: 福島県特別支援教育センター2020【学びの履歴】

<国語科ワーキンググループ>

○各学部における国語科の指導内容について情報交換

- ・年間指導計画の活用

○小学部から高等部までの指導内容の系統性について検討

- ・熊本大学教育学部附属特別支援学校「指導内容確認表」の活用

○教材・教具を見合う会

- ・各学部の国語科の授業で使用している教材・教具を紹介し合う。

○小学部研究に関する意見交換

- ・他学部の視点から、小学部研究の取組「国語科と日常生活の指導及び生活単元学習との関連」について意見交換→改善と発展

研究の実際

実態把握

学習指導要領を
活用した実態把握

子ども理解シートを
活用した実態把握

二つのツールを活用したことで、
より児童の実態に合っためあての設定や、
的確な支援を行ることができた。



めあてと振り返りの情報交換



様々な方法を共有し、授業改善に役立
った。指導の評価の一材料にもなった。

単元配列表の活用：各教科等を合わせた指導との関連の明確化

※年間指導計画（後期）より		主な指導内容・展開の工夫等			
		8月	10月	11月	12月
国語科	朝の活動				
生活科	朝の会・あいさつ・帰りの会・帰りの発表				
算数科	算数の朝の会				
英語科	英語の朝の会				
音楽科	音楽の朝の会				
体育科	体育の朝の会				
道徳科	道徳の朝の会				
総合学習	総合学習の朝の会				
特別活動	特別活動の朝の会				
その他	その他				

○国語科、日常生活の指導、
生活単元学習の年間指導
計画より主な指導内容を
ピックアップ
○指導の内容、方法、時期等
の明確化



単元配列表を活用し、どのように関連付けていくのか明
確にできた。また、ワーキンググループを通して、他学部の
視点を生かして指導内容のバージョンアップを図った。

授業づくりの工夫



めあては？
振り返りは？
教材は？

指導案検討 模擬授業

指導案検討に模
擬授業を加えたこ
とで、児童側、教師
側それぞれの立場
に立って「めあての
焦点化」等の吟味が
できた。



まとめ

【児童の変容】

学んだことを生活に生かしたり、問い掛けを理
解して正しく答えようとしたりする姿

気持ちを表す言葉と実際の表情が結びつく
ようになり、描く絵が表情豊かになったよ！
エピソード記録より



【学びを実感し、学びをつなげる支援の工夫】

- ・資質・能力に合わせた実態把握
- ・国語科と各教科等を合わせた指導との関連の明確化

児童の実態や、関連させる指導内容等が可視化さ
れ、学部全体で共通理解できた。



【児童による学習評価の充実】

- ・めあての焦点化
- ・多面的な評価の積み重ね→エピソード記録、学習成果の見取り

児童が自己評価したり、学びを実感したりす
ることにつながった。



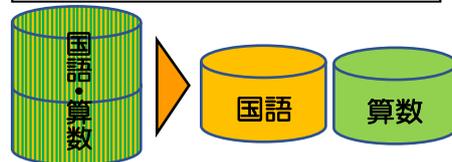
教育課程編成に向けての提言

目指す児童の姿に迫るための
丁寧な基盤づくりの継続

より一層の
学習評価の充実

授業や児童の変容に関する
確実な情報共有

バランスよく学習するために



中学部 ー保健体育科ー

1年次の成果と課題 (○: 成果 ▲課題)

- めあてが分かり、意欲的に学習に取り組む姿
- 自己評価、相互評価の高まり
- 技能、体力の伸び、運動好きな生徒の増加

- ▲自己評価から次の目標設定
- ▲資質・能力3つの柱の時間配分
- ▲3年間を見通した指導計画づくり



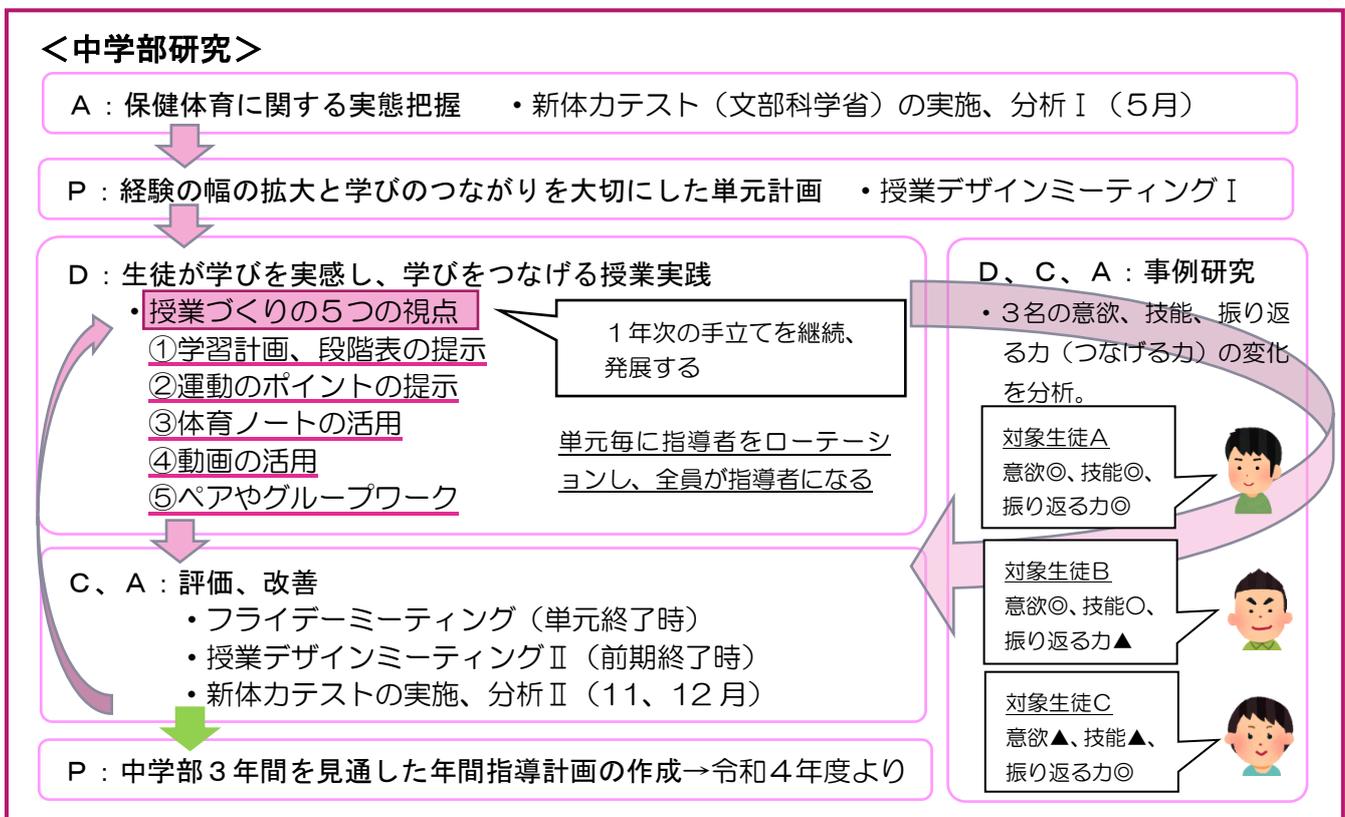
生徒の実態

- 1年生に運動が苦手な生徒もいるが、2、3年生は友達と進んで運動する。
- ▲次の単元や運動、他場面とつながらない。

目指す姿 (2年次)

- 学びを実感し、目標に向かって運動を楽しむ。
- 運動のポイントが分かり、友達との伝え合いを通し、技能が向上する。

内容と方法



< 保健体育科ワーキンググループ >

- 令和3年度中学部保健体育科年間指導計画の検討
- 中学部全校授業研究会 (保健体育科) 指導案の検討
- 3年間を見通した指導計画の検討

< 小学部、高等部 >

- (保健) 体育科の授業へ生かす
- 12年間を見通した各学部の指導計画の検討

研究の実際

新体カテストの実施 I

- ▲ハンドボール投げ: 他の項目より全国平均と差がある、じっくり取り組んだことがない
- 「投げる」運動を取り入れた単元の設定 (11、12月)



高等部 一職業科・家庭科一

1年次の成果と課題 (○：成果 ▲：課題)

- 学習ゴールからの組み立て
- 学びをつなぐ授業づくりの工夫

- ▲自分の成長を実感できる振り返りの工夫
- ▲学びの蓄積を活用できる場面設定

生徒の実態

- 学んだことを他の学習に生かす
- ▲家庭や寄宿舎などの生活につながらない



目指す姿 (2年次)

- 学んだことを実感する
- 自分事として生活に生かす



内容と方法

<高等部研究>

生徒の実態把握と目指す姿の共有、見直し

- ・授業デザインミーティングⅠ・Ⅱの実施
- ・生徒、職員に対するアンケート調査Ⅰ・Ⅱ



生徒による学習評価の充実を目指した授業づくり

- ・自分事として捉えられる「めあて」の設定
- ・学びを実感し、学びをつなげるための実践、授業場面の工夫一覧の作成
- ・学びを積み重ね、日常的に活用する展開の工夫



各教科等の関連や成果・課題の共有

- ・目標、評価の動画上映習慣の実施
- ・導入、振り返りの動画を見合う会の実施
- ・成果と課題に関する職員アンケート調査Ⅲ



<職業科・家庭科ワーキンググループ>

- ・中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧の作成
 - 各学部における職業科・家庭科に関する指導内容について情報交換
 - 年間指導計画を活用した、中学部における職業・家庭科に関する指導内容の整理、検討



研究の実際

生徒、職員に対するアンケート調査Ⅰ

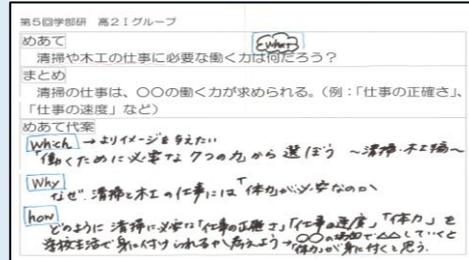
対象	項目	5月
生徒	⑬学んだことを生活に生かす	3. 18
職員	⑲学びがにつながる支援の工夫	2. 81

4点：よくしている 3点ときどきしている
2点：あまりしていない 1点：ほとんどしていない



学んだことを次の学び
や実生活に生かす意図
的な場面設定が必要

自分事として捉えられる「めあて」の設定



授業のゴールから組み立てるこ
とで、対象教科以外の授業でも
「めあて」が練られてきた

学びを積み重ね、日常的に活用する展開の工夫

高1 Iグループ 職業科	校内実習の振り返り →日常で挑戦する目標設定
高2 Iグループ 家庭科	寄宿舎の清掃体験 →夏休みの課題設定
高3 IIグループ 職業科	学年を越えた学び合い →自分事として課題に向き合う



寄宿舎や家庭と連携した授業づくりを意識することで、学んだことを生かす必然性が高まり、学びが繋がっている

導入、振り返りの動画を見合う会の実施

導入と振り返りにおける基礎・基本

導入	<ul style="list-style-type: none"> 前時の「振り返り」でつながる本時 生徒の理解度に応じた「めあて」の提示 学習の見通しがもてる本時の流れや学習計画の提示
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 学んだことを実感できるシートの工夫 個の学びを全体の学びにする場面設定



学びがつながりにくい知的障害の生徒にとって、1時間完結の授業だけでなく、時間をおいて確認する効果を感じた

生徒、職員に対するアンケート調査 II

対象	項目	5月12月	増減
生徒	⑬学んだことを生活に生かす	3.18	+0.16
		3.34	
職員	②目指す姿の明確化	3.19	+0.37
		3.56	
	③教材・題材・資料等の選定	3.23	+0.36
		3.59	
⑱学びが繋がる支援の工夫	2.81	+0.52	
	3.33		



授業で学び、家事をしようという気持ちになり何回か家事をした(高3・男子)

職業科・家庭科ワーキンググループ

	1年生 【知る】	2年生 【広げる】	3年生 【深める】
職業科(調理・福祉)	○中学部スタート A (イ) ・レクリエーション、友達を知る、自己紹介 ○未来へのスケッチ A (ア) (イ) ・自分の好きなこと、将来の夢 ・個人目標 ○未来へ向かって A (ア)、Aイ②③、C (ア) (イ) ・食品加工場でフコイランランチ利用 ・高等部校内実習見学 ・福祉施設、職業見学 ・福祉施設見学	○2年生スタート A (イ) ・レクリエーション、友達を知る、自己紹介 ○未来へのスケッチ A (ア) (イ) ・自分の得意なこと、やってみたい仕事、自己理解 ・個人目標 ○未来へ向かって A (ア)、Aイ②③、C (ア) (イ) ・高等部作業学習・校内実習見学 ・福祉施設、職業見学 ・食品加工場でフコイランランチ調理体験	○3年生スタート A (イ) ・レクリエーション、友達を知る、自己紹介 ○未来へのスケッチ A (ア) (イ) ・自分の長所、短所、自己理解、他者理解 ・個人目標 ○未来へ向かって A (ア)、Aイ②③、C (ア) (イ) ・高等部体験(書写、体カトレーニング、作業学習、職業科) ・福祉施設、職業見学 ・高等部作業学習、校内実習、実習報告会見学 ・福祉施設、職業見学 ・職業体験(1日) ・高等部入学希望者・面接練習

中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧の作成



学部を越えて中学部の職業教育について検討することで、学習指導要領に示されている内容を確認できた

まとめ

生徒の変容
自分事として
捉える姿の高まり

単元計画、各教科との関連、
家庭や寄宿舎との連携
→生徒の主体性 up



学びを実感し、学びをつなげる支援の工夫
家庭や寄宿舎との連携の充実

寄宿舎を活用した実践的な学習、
学んだことを行かす必然性
→学びをつなげる姿の増加



生徒による学習評価の充実
肯定的な評価の活用

生徒同士によるプラスの
評価、他者評価の活用
→肯定的に自己を
捉える姿の増加



教育課程編成に向けての提言

各教科等との関連や系統性の整理

- 各教科等とのつながりが見える
指導計画の作成
- 適正な授業時数の検討



継続的に取り組む教育課程の編成



12年間を通した学びの連続性

寄宿舍 一日常生活指導一

1年次の成果と課題（○：成果 ▲：課題）

- 生徒の願いを反映した具体的な目標設定、生徒が互いに学び合い工夫する姿
- ▲ 自己評価のために生徒ができた、失敗したなど実感を伴う活動の必要性

生徒の実態

- 目標を意識しながら生活している
- ▲ 寄宿舍でできていることが他の場面につながらない



目指す姿（2年次）

目的をもって意欲的に生活する
様々な場面で対応できる生活力が身につく

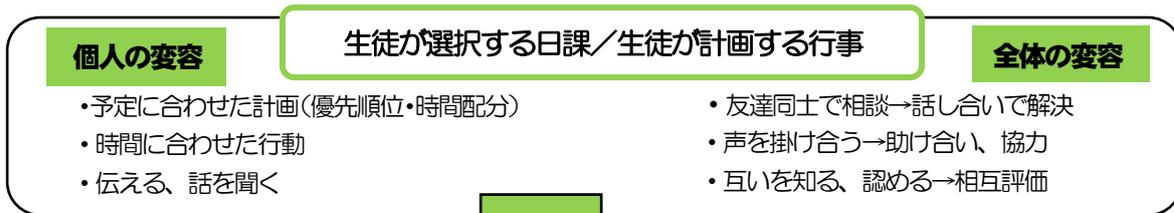
内容と方法／研究の実際

おおぞらシートを活用した関係者との情報の共有と連携

※後期は、シート⑤から⑦を下記と同様の手順で活用する



生徒が考えて生活できる環境作り



- できた、失敗した原因を考える（自己評価）→言葉掛けを待たずに行動する生徒の増加
- 生徒が協働して生活する集団生活の特色（相互評価）→友達の考えも取り入れた経験を生活に生かす姿

まとめ

<p>生徒の姿容</p> <p>目的をもち意欲的に考えて生活する姿 場面が変わっても対応できる生活力 友達と協働して生活する姿</p>	<p>学びを実感し 学びをつなげる支援の工夫</p> <p>学部・保護者との興味・関心、 生活の様子等情報の共有、連携</p>	<p>生徒による学習評価の充実</p> <p>経験の積み重ね→できたことを実感 集団生活の特色を生かした相互評価</p>
--	--	---

次年度へ向けての提言

- ・ 生徒が意欲的に生活するためのおおぞらシートを活用した支援の継続
- ・ 様々な場面に対応できる生活力を育てるために学部・保護者との連携の継続
- ・ 生徒が協働して生活する寄宿舍の特色を生かした生活指導の改善（勉強会の見直し、生徒用テキストの作成）

道川分教室 ー 自立活動の授業づくりを通してー

1年次の成果と課題 (○: 成果 ▲: 課題)

- 映像記録で共有する客観的な評価
- 評価のポイントが分かる学習評価記録用紙の作成と活用
- 思いを読み取るエピソード記録の活用

- ▲児童生徒一人一人にとって学びを
実感できる学習評価の在り方
- ▲客観的評価のためのツールの充実

児童生徒の実態と目指す姿 (2年次)

実 態	<ul style="list-style-type: none"> ・脳性まひ等に起因する重度の肢体不自由と知的障害を有する ・医療的ケアや生活支援が必要 ・周囲からの働き掛けに心を動かしているが、その表出は微細 	
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりに周囲の状況が分かり働き掛けを受け止め、表情や発声、身体の動き等で達成感を表す姿 	

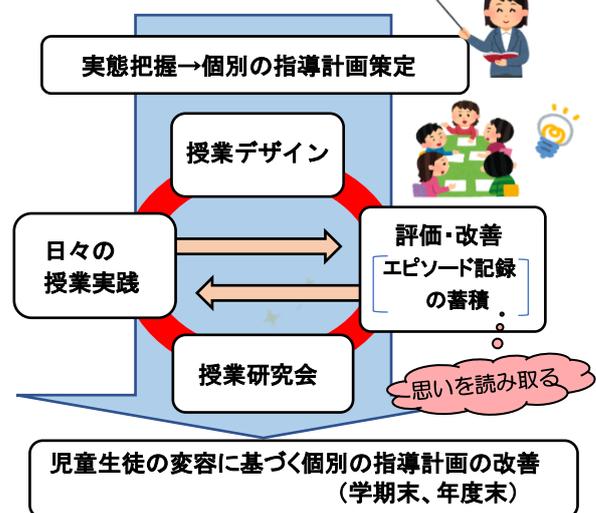
内容と方法 / 研究の実際

「授業づくり検討会」による授業づくり

- ①実態把握
 - アセスメントチェックリスト 流れ図(道川版)
- ②授業構想や学習評価に係るツールの作成と活用
 - 道川授業デザインシート 個に応じた題材計画
 - 学習評価記録用紙A・B 実態に応じた学習評価
- ③映像及びエピソード記録等の活用 
- ④授業研究会
- ⑤児童生徒の変容に基づく個別の指導計画の改善

授業づくりを支える研修

チーム(全職員)での授業づくり・授業改善 「授業づくり検討会」



まとめ

【児童の変容】

○表情が豊かになり、手指・上肢の動きが活発になった

刺激に対して口元を動かす

呼び掛けると顔を向ける

タイミングよく教具を引っ張る

指を動かしてタブレット端末の音を出す

学びを実感し
達成感を表す姿



【学びを実感し、学びをつなげる授業づくりのポイント】

○授業デザイン (題材づくり)

- ・個々の実態に応じた題材構想
- ・単なる繰り返しでない、流れのある題材計画
- ・前題材の目指す姿を踏まえた、学びのステップアップ

○個に応じた学習評価

- ・「達成感を表す姿」で捉える学習評価
- ・エピソード記録の分析と考察 (思いを読み取る)

↓
目標の達成度、支援の改善の明確化

○個別の指導計画の改善

- ・実態に応じた学習の展開
- ・効果的な支援等の実施



【学習評価の充実に向けて】

- ・異なる学びの履歴や学び方を前提とした、多角的な評価



研究の実際

教科ワーキンググループ (WG) の実施

⇒研究対象の各教科について教科WGを実施した。
WGメンバーは、各教科の免許保有者や各学部の担当者などで構成した。学部を越えた視点で検討され、一貫性や系統性を図ることにつながった。

国語科
WG

保健体育科
WG

職業科・家庭科
WG

各教科等合わせ 各教科等合わせ 各教科等合わせ
た指導との関連 た指導との関連 た指導との関連
の検討 作成 作成 作成

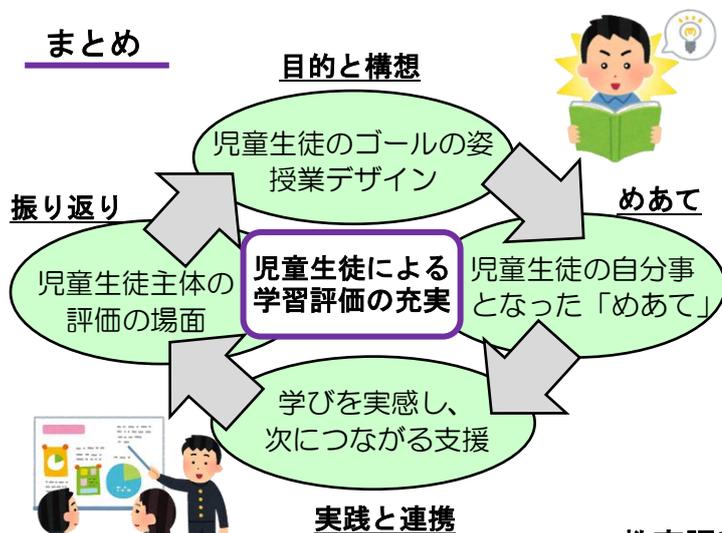
- 児童生徒の実態把握と目指す姿のもと、ゴール(振り返りやまとめ)からの授業デザインの定着
⇒「何を学ぶか」「何が身に付いたか」に着目
- ▲児童生徒主体の計画や目標、評価場面の設定
⇒「自分事になるしかけ」の必要性

「教科の特質に関連した項目」⇒学部の伸びが高い項目
④発問や板書の工夫 小学部 2.77⇒3.48
⑪成果の見取り、価値付け等 中学部 2.88⇒3.35
⑲学びがにつながる支援の工夫 高等部 2.81⇒3.33

授業デザインミーティングの実施

⇒教育専門監や授業アドバイザー、教科WGメンバーから各学部の視点から様々なアドバイスをもらい、単元構想、評価・改善につながる機会となった。

まとめ



学部	児童生徒による学習評価の充実に向けたポイント(2年次)
小	児童が自己評価できるめあての焦点化と多面的な評価の積み重ね
中	明確な目標、実践、視覚化された相互評価のスパイラル
高	長期的視点での学びの積み重ねと学びのバトンが繋がる支援

授業づくりに関するアンケート結果

カテゴリー	項目	全体	増減	
実態把握	①子どもの実態把握	3.13 3.50	+0.37	
	②目指す姿の明確化	3.09 3.49	+0.40	
授業づくり	③教材・題材・資料等の選定	3.22 3.55	+0.33	
	④発問や板書の工夫	2.94 3.34	+0.40	
	⑤学習の見通し	3.02 3.47	+0.45	
	⑥子どもの成長の評価	2.92 3.27	+0.35	
	⑦めあてカードの使用	3.40 3.65	+0.25	
	⑧振り返りカードの使用	2.82 3.03	+0.21	
	⑨ゴールからの「めあて」の設定	3.14 3.50	+0.36	
	⑩整理とまとめの時間の保障	2.75 3.11	+0.36	
	⑪成果の見取り、価値付けや意味付け	3.10 3.36	+0.26	
	⑫学びを実感する支援の工夫	3.06 3.21	+0.15	
	⑬学びを実感する児童生徒の姿	2.80 3.20	+0.40	
	授業改善	⑭めあてと振り返りの整合性	3.09 3.39	+0.30
		⑮次の学習への意欲や見通し	3.05 3.27	+0.22
⑯個別指の目標の児童生徒との共有		2.45 2.64	+0.19	
⑰個別指の評価の児童生徒との共有		2.30 2.58	+0.28	
⑱単元(題材)計画を児童生徒と作成		2.03 2.44	+0.41	
その他	⑲学びがにつながる支援の工夫	2.87 3.26	+0.39	
	⑳学びをつなげる児童生徒の姿	2.91 3.18	+0.27	

※上段はI(5月)、下段はII(12月)の平均値の結果
評価点⇒4:よくしている 3:ときどきしている
2:あまりしていない 1:ほとんどしていない

教育課程編成に向けての提言

児童生徒が自分事になる授業と
学びをつなぐ環境作り

教科ワーキンググループの継続と
弾力的な校内職員の活用

学習履歴(スタディ・ログ)の活用
による児童生徒の学びのつながり



秋田県立ゆり支援学校研究紀要『研究ゆり』第23号 別冊

印刷・発行 令和4年3月

発行 秋田県立ゆり支援学校

〒015-0885 秋田県由利本荘市水林456-3

TEL 0184-27-2630

FAX 0184-22-8706

Mail yuri-s@akita-pref.ed.jp

HP <http://www.yuri-s.akita-pref.ed.jp>